

スタンダードモード用ジョブ
実行エージェント構築ガイド

JobCenter

R16.3

-
- Windows, Windows Server, Microsoft Azure, Microsoft Excel, Internet Explorer および Microsoft Edge は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
 - UNIX は、The Open Group が独占的にライセンスしている米国ならびにほかの国における登録商標です。
 - HP-UX は、米国 HP Hewlett Packard Group LLC の商標です。
 - AIX は、米国 IBM Corporation の商標です。
 - Linux は、Linus Torvalds 氏の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
 - Oracle Linux, Oracle Clusterware および Java は、Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の米国およびその他の国における登録商標です。
 - Red Hat は、Red Hat, Inc. の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
 - SUSE は、SUSE LLC の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
 - NQS は、NASA Ames Research Center のために Sterling Software 社が開発した Network Queuing System です。
 - SAP ERP, SAP NetWeaver BW および ABAP は、SAP AG の登録商標または商標です。
 - Amazon Web Services およびその他の AWS 商標は、Amazon.com, Inc. またはその関連会社の米国およびその他の国における商標です。
 - iPad, iPadOS および Safari は、米国およびその他の国で登録された Apple Inc. の商標です。
 - iOS は、Apple Inc. のOS名称です。IOS は、Cisco Systems, Inc. またはその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標であり、ライセンスに基づき使用されています。
 - Docker は、米国およびその他の国で登録された Docker, Inc. の登録商標または商標です。
 - Firefox は、Mozilla Foundation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。
 - UiPath は、UiPath 社の米国およびその他の国における商標です。
 - Box, boxロゴは、Box, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。
 - その他、本書に記載されているソフトウェア製品およびハードウェア製品の名称は、関係各社の登録商標または商標です。

なお、本書内では、R、TM、cの記号は省略しています。

本マニュアルでは、製品名およびサービス名を次のように略称表記しています。

略称	製品名・サービス名
Office	Microsoft Office
Excel	Microsoft Excel
Azure	Microsoft Azure
Internet Explorer	Internet Explorer 11
Firefox	Mozilla Firefox
AWS	Amazon Web Services
EC2	Amazon Elastic Compute Cloud
EBS	Amazon Elastic Block Store
S3	Amazon Simple Storage Service
ELB	Elastic Load Balancing
CloudFormation, CF	AWS CloudFormation
CloudWatch, CW	Amazon CloudWatch
RDS	Amazon Relational Database Service
Glue	AWS Glue
Lambda	AWS Lambda
EKS	Amazon Elastic Kubernetes Service
ECS	Amazon Elastic Container Service
STS	AWS Security Token Service
CloudWatch Logs	Amazon CloudWatch Logs
SNS	Amazon Simple Notification Service

輸出する際の注意事項

本製品（ソフトウェア）は、外国為替令に定める提供を規制される技術に該当いたしますので、日本国外へ持ち出す際には日本国政府の役務取引許可申請等必要な手続きをお取りください。許可手続き等にあたり特別な資料等が必要な場合には、お買い上げの販売店またはお近くの当社営業拠点にご相談ください。

はじめに

本書は、JobCenter のジョブ実行を行う JobCenter AGについて説明しています。なお、本書内に記載されている画面例と実際の画面とは異なることがありますので注意してください。

本書の内容は将来、予告なしに変更する場合があります。あらかじめご了承ください。

1. マニュアルの読み方

- 本バージョンにおける新規機能や変更事項を理解したい場合
 - <スタンダードモード用リリースメモ>を参照してください。
- JobCenterを新規にインストール、またはバージョンアップされる場合
 - <セットアップガイド>を参照してください。
- JobCenterを初めて利用される場合
 - <セットアップガイド>を参照してください。
- JobCenterの基本的な操作方法を理解したい場合
 - <スタンダードモード用基本操作ガイド>を参照してください。
- JobCenterの動作を制御する設定やネットワーク関連の設定を理解したい場合
 - ジョブ管理マネージャ(MG)機能の設定については<スタンダードモード用環境構築ガイド>を参照してください。
 - ジョブ実行エージェント(AG)機能の設定については<スタンダードモード用ジョブ実行エージェント構築ガイド>を参照してください。
- JobCenterの操作をコマンドラインから行う場合
 - <スタンダードモード用コマンドリファレンス>を参照してください。
- JobCenterのイベントログ出力方法など監視に関連した機能を理解したい場合
 - <スタンダードモード用環境構築ガイド>を参照してください。
- 運用中のJobCenterを新環境に移行する場合
 - <スタンダードモード用移行ガイド>を参照してください。
- JobCenterのクラスタ環境を構築したい場合
 - <スタンダードモード用クラスタ機能利用の手引き>を参照してください。
- ブラウザを用いたJobCenterの監視やWebAPIでの制御などWebに関連した機能を理解したい場合
 - <スタンダードモード用Web機能利用の手引き>を参照してください。
- その他機能についてお知りになりたい場合
 - 関連マニュアルの内容をお読みいただき、目的のマニュアルを参照してください。

2. コマンドの表記方法

(例)

コマンド中の | は、「または」を意味します。

各オプションは、「-英文字 オプション名(\$xxx)」または「-数字(-\$xxx)」となります。

引数は、「引数名(\$xxx)」となります。

[]付きのオプションは、省略可能です。

・・・ は直前の記述が繰り返し可能なことを意味します。

3. 凡例

本書内での凡例を紹介します。

	気をつけて読んでいただきたい内容です。
	本文中の補足説明
	本文中のヒントとなる説明
注	本文中につけた注の説明
—	UNIX版のインストール画面の説明では、__部分(下線部分)はキーボードからの入力を示します。

4. 関連マニュアル

JobCenter に関するマニュアルです。JobCenter メディア内に格納されています。

最新のマニュアルは、JobCenter 製品サイトのダウンロードのページを参照してください。

<https://jpn.nec.com/websam/jobcenter/download.html>

【スタンダードモードのマニュアル】

資料名	概要
JobCenter セットアップガイド	JobCenterを新規にインストール、またはバージョンアップする場合の方法について説明しています。
JobCenter 基本操作ガイド	JobCenterの基本機能、操作方法について説明しています。
JobCenter 環境構築ガイド	JobCenterを利用するために必要なジョブ実行マネージャ環境の構築方法や設定方法の詳細、マネージャ環境の運用に役立つ機能について説明しています。
JobCenter ジョブ実行エージェント構築ガイド	JobCenterを利用するために必要なジョブ実行エージェント環境の構築方法や設定方法の詳細について説明しています。
JobCenter コマンドリファレンス	GUIと同様にジョブネットワークの投入、実行状況の参照などをコマンドラインから行うために、JobCenterで用意されているコマンドについて説明しています。
JobCenter クラスタ機能利用の手引き	クラスタシステムでJobCenterを操作するための連携方法について説明しています。
JobCenter Web機能利用の手引き	Webブラウザ上でジョブ監視を行うことができるWebコンソール機能、ジョブネットワークやトラッカ等の情報を参照、制御をHTTPプロトコルで行えるWebAPI機能について説明しています。
JobCenter 移行ガイド	運用中のJobCenterを別の新環境に移行する手順について横断的に説明しています。
JobCenter R16.3 リリースメモ	バージョン固有の情報を記載しています。

【クラシックモードのマニュアル】

資料名	概要
JobCenter インストールガイド	JobCenterを新規にインストール、またはバージョンアップする場合の方法について説明しています。
JobCenter クイックスタート編	初めてJobCenterをお使いになる方を対象に、JobCenterの基本的な機能と一通りの操作を説明しています。
JobCenter 基本操作ガイド	JobCenterの基本機能、操作方法について説明しています。
JobCenter 環境構築ガイド	JobCenterを利用するために必要な環境の構築、環境の移行や他製品との連携などの各種設定方法について説明しています。
JobCenter NQS機能利用の手引き	JobCenterの基盤であるNQSの機能をJobCenterから利用する方法について説明しています。
JobCenter コマンドリファレンス	GUIと同様にジョブネットワークの投入、実行状況の参照などをコマンドラインから行うために、JobCenterで用意されているコマンドについて説明しています。
JobCenter クラスタ機能利用の手引き	クラスタシステムでJobCenterを操作するための連携方法について説明しています。
JobCenter SAP機能利用の手引き	JobCenterをSAPと連携させるための方法について説明しています。
JobCenter WebOTX Batch Server連携機能利用の手引き	JobCenterをWebOTX Batch Serverと連携させるための方法について説明しています。

資料名	概要
JobCenter Web機能利用の手引き	Webブラウザ上でジョブ監視を行うことができるWebコンソール機能、ジョブネットワークやトラッカ等の情報を参照、制御をHTTPプロトコルで行えるWebAPI機能について説明しています。CL/Webについては以下のR16.2のWeb機能利用の手引きを参照してください。 https://jpn.nec.com/websam/jobcenter/download/manual/16_2/JB_CLS_WEB.pdf
JobCenter クラスタ環境でのバージョンアップ・パッチ適用ガイド	クラスタ環境で運用しているJobCenterのアップデート、パッチ適用手順を説明しています。
JobCenter 運用・構築ガイド	JobCenterの設計、構築、開発、運用について横断的に説明しています。
JobCenter 移行ガイド	運用中のJobCenterを別の新環境に移行する手順について横断的に説明しています。
JobCenter コンテナガイド	JobCenterをコンテナ環境で構築・運用する方法について説明しています。
JobCenter R16.3 リリースメモ	バージョン固有の情報を記載しています。

【共通のマニュアル】

資料名	概要
JobCenter 操作・実行ログ機能利用の手引き	JobCenter CL/Winからの操作ログ、ジョブネットワーク実行ログ取得機能および設定方法について説明しています。
JobCenter Helper機能利用の手引き	Excelを用いたJobCenterの効率的な運用をサポートするJobCenter Definition Helper (定義情報のメンテナンス)、JobCenter Report Helper (帳票作成)、JobCenter Analysis Helper (性能分析)の3つの機能について説明しています。
JobCenter テキスト定義機能の利用手引き	JobCenterの定義情報をテキストファイルで定義する方法について説明しています。
JobCenter 拡張カスタムジョブ部品利用の手引き	拡張カスタムジョブとして提供される各部品の利用方法について説明しています。

5. 改版履歴

版数	変更日付	項目	形式	変更内容
1	2024/04/19	新規作成	—	第1版

目次

はじめに	iv
1. マニュアルの読み方	v
2. コマンドの表記方法	vi
3. 凡例	vii
4. 関連マニュアル	viii
5. 改版履歴	x
1. 概要	1
2. エージェントの環境構築	3
2.1. 言語設定	5
2.1.1. 初期設定	5
2.1.2. 言語の変更	6
2.2. インスタンス作成	7
2.3. インスタンス更新	10
2.4. インスタンス削除	13
2.5. サービス登録	14
2.6. サービスの起動と停止	15
2.6.1. サービスの起動	15
2.6.2. サービスの停止	15
2.6.3. サービスの状態確認	15
2.6.4. OSのシャットダウンに関する注意事項	16
2.7. OSユーザ登録	17
2.8. OSユーザ登録解除	19
3. エージェントの運用	20
3.1. エージェントの動作設定変更	21
3.1.1. エージェントの設定一覧	21
3.1.2. マネージャへの接続のリトライ間隔を変更する	27
3.1.3. ログサイズ、世代数を変更する	28
3.1.4. 再起動時の動作を変更する	28
3.1.5. リクエスト実行時の環境変数の設定を変更する	37
3.1.6. リクエストの実行ユーザの設定変更を即時に反映できるように変更する(Windows)	39
3.1.7. 巨大な出力結果の退避によるディスク使用量を制限する	39
3.1.8. 実行中リクエストの出力結果の更新頻度を変更する	40
3.1.9. ファイル待ち合わせの動作を変更する	40
3.2. エージェントの構成情報のバックアップ・復元	42
3.2.1. エージェントの構成情報のバックアップ	42
3.2.2. エージェントの構成情報の復元	42
3.3. JobCenter AGのプロセス監視	44
3.3.1. JobCenter AGプロセスの監視方法(Windowsの場合)	44
3.3.2. JobCenter AGプロセスの監視方法(Linuxの場合)	44
4. OS要塞化	45
5. トラブルシューティング	46
5.1. JobCenter Agent の障害発生時、原因究明に必要な情報を採取する	47
5.1.1. jc_getinfoコマンドで採取する場合	47
5.2. JobCenter Agentのログフォーマット	48

表の一覧

2.1. エージェントを利用するために必要な作業	3
2.2. エージェントの設定内容の変更や削除に必要な作業一覧	4
2.3. エージェントに設定可能な言語一覧	6
2.4. jcagctrl createコマンドの引数	7
2.5. jcagctrl updateコマンドで変更可能なパラメータに対応する引数	10
3.1. エージェントの設定ファイルのパラメーター一覧	21
3.2. エージェントの構成情報のバックアップファイル	42
5.1. エージェントのログフォーマット	48

1. 概要

JobCenter AGはJobCenter MGからの指示を受けてバッチ処理を実行するアプリケーションです。JobCenter AGは単体では動作しませんので、必ずJobCenter MGとの連携設定が必要となります。

JobCenter AGとJobCenter MGの連携設定の概要は下図の通りとなります。

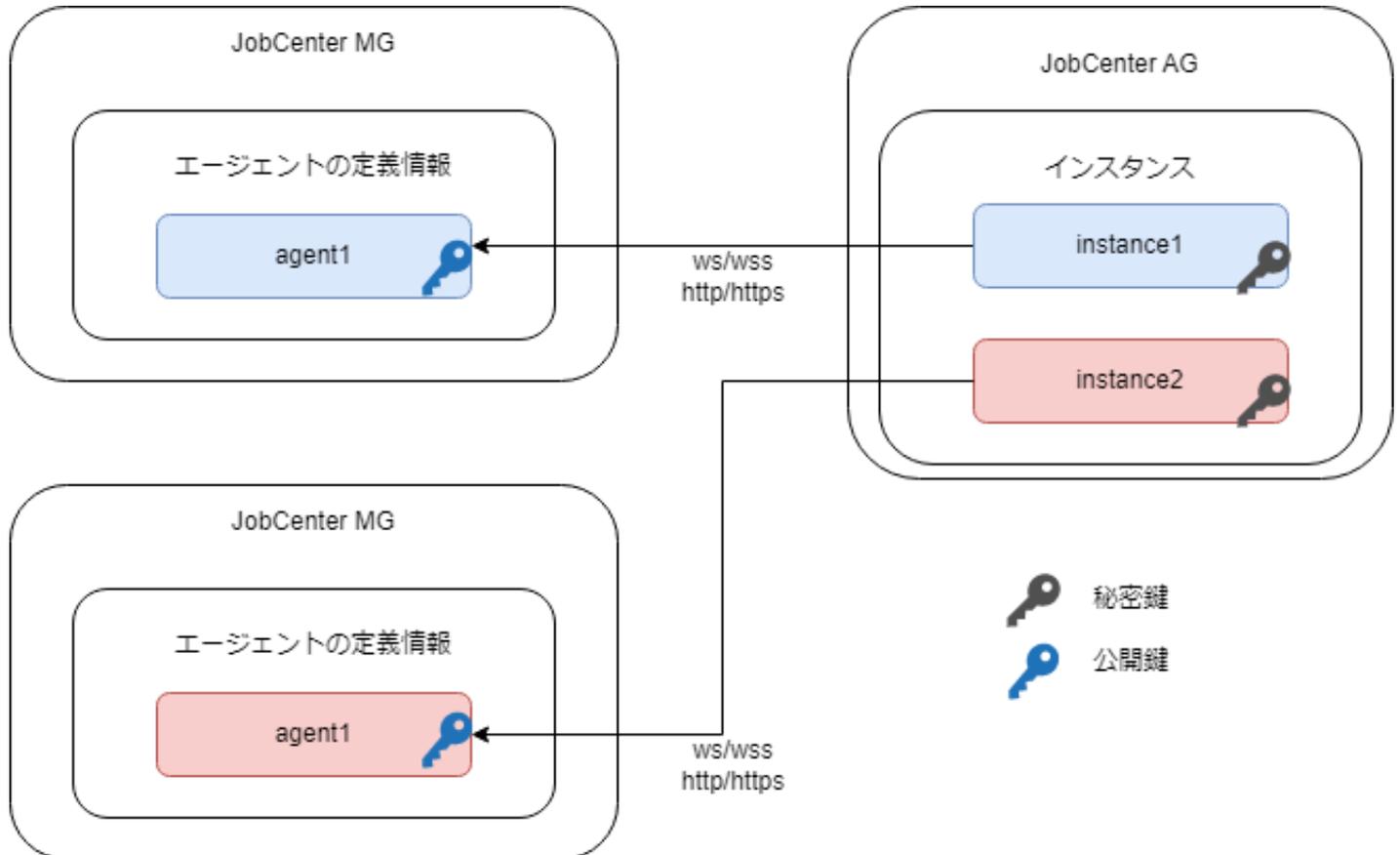


図1.1 JobCenter MGとJobCenter AGの連携の概要

JobCenter AGではインスタンスという実行単位毎にアプリケーション(プロセス)を起動し、JobCenter MGとの連携やバッチ処理の実行を行います。

インスタンス毎に管理する情報として接続先のJobCenter MGのエンドポイント、連携時の認証に使用する秘密鍵の格納場所、インスタンスが使用するspoolディレクトリなどがあります。



spoolディレクトリとは、エージェントのインスタンスのデータを格納するディレクトリとなります。

JobCenter AGの各インスタンスとJobCenter MGの通信はws/wss(WebSocket)およびhttp/https通信で行われます。

連携設定時に使用されるのはws/wss(WebSocket)通信であり、http/https通信については連携設定後に通信量が大きくなる可能性がある一部の通信(バッチ処理の結果返却など)で使用されます。

またコネクションの確立を行うのはJobCenter AGからJobCenter MGに対してのみとなります。このため、JobCenter AGからJobCenter MGに対して通信ができる環境であれば連携が可能です。

連携設定時、JobCenter MGではJobCenter AGからの接続が不正な接続ではないことを保証するために、秘密鍵と公開鍵を用いた認証を行います。

具体的にはJobCenter MG上では公開鍵を保持しJobCenter AG側で公開鍵に対応する秘密鍵を指定することで、接続してきたJobCenter AGが信用できるか(秘密鍵が公開鍵に対応しているか)を検証します。



JobCenterでは実行するバッチ処理をリクエストという単位で管理します。

ジョブネットワークの中の単位ジョブやカスタムジョブ、拡張カスタムジョブなどジョブの実行毎に1つのリクエストを作成し、リクエスト単位でキューイング、およびJobCenter AG側での実行を行います。

ジョブの状態は対応するリクエストの状態にひもづきます。このため、内部エラーなどバッチ処理以外の部分でリクエストが異常終了した場合は対応するジョブも異常終了します。



JobCenter MG側に事前に公開鍵を設定する必要があるため、事前にJobCenter MG側でエージェントの定義情報の登録が必要となります。

JobCenter MG側でのエージェントの定義情報の登録の詳細については<スタンダードモード用環境構築ガイド>の「4.1 エージェントの管理」を参照してください。



JobCenter AG上に配置する秘密鍵の格納場所については任意の場所で問題ありませんが、重要な認証情報となりますので一般ユーザではアクセスできない場所に配置いただき、秘密鍵自体も一般ユーザでアクセスできないよう適切に権限を設定いただくことを推奨いたします。

2. エージェントの環境構築

エージェントの環境構築手順について説明します。

エージェントの環境構築は、JobCenter AGのjcagctrlコマンドを使用します。jcagctrlコマンドの詳細については、<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「4.1 jcagctrl エージェントの情報を管理」を参照してください。



- 本マニュアルは、エージェント側で設定する環境構築手順について記載しています。エージェントを利用するにはマネージャ側の設定が必要な項目があります。詳細は表2.1「エージェントを利用するために必要な作業」の手順列に記載しているマニュアルを参照してください。
- jcagctrlコマンドは、UNIX版ではrootユーザ、Windows版ではAdministratorsグループのユーザで実行してください。
- コマンド中の %InstallDirectory% は、Windows版JobCenter AGのインストールディレクトリに読み替えてください。

エージェントを利用するために必要な作業は以下のとおりです。

表2.1 エージェントを利用するために必要な作業

対象	作業内容	手順
マネージャ	マネージャへのエージェント登録	<スタンダードモード用環境構築ガイド>の「4.1 エージェントの管理」
エージェント	言語設定(初期設定)	「2.1.1 初期設定」
エージェント	インスタンス作成	「2.2 インスタンス作成」
エージェント	サービス登録	「2.5 サービス登録」
エージェント	サービス起動	「2.6.1 サービスの起動」
エージェント	OSユーザ登録	「2.7 OSユーザ登録」
マネージャ	ユーザマッピング登録	<スタンダードモード用環境構築ガイド>の「4.2 ユーザマッピング」

以下の作業はエージェントのインスタンスの設定内容の更新や削除手順です。実施したい場合に参照してください。

表2.2 エージェントの設定内容の変更や削除に必要な作業一覧

対象	作業内容	手順
エージェント	言語設定(変更)	「2.1.2 言語の変更」
エージェント	インスタンス更新	「2.2 インスタンス作成」
エージェント	インスタンス削除	「2.4 インスタンス削除」
エージェント	OSユーザ登録解除	「2.8 OSユーザ登録解除」

2.1. 言語設定

エージェントの言語を設定する手順について説明します。

単位ジョブ等のバッチ処理を実行する際に使用する言語になります。エージェントの環境構築の最初に必ず設定する必要があります。



本設定はJobCenter AGをインストールしたマシン上で共通となります。インスタンスごとに異なる言語を設定することはできません。

2.1.1. 初期設定

エージェントの言語設定を初めて実施する場合の手順について説明します。

エージェントの言語設定はjcagctrl set-langコマンドで行います。以下のコマンドを実行してください。

■UNIX版

```
/usr/bin/jcagctrl set-lang --lang $lang
```

■Windows版

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl set-lang --lang $lang [--unicode-mode]
```

\$langには、設定したい言語に対応した値を指定します。JobCenter AGをインストールしたOSによって選択可能な言語が異なります。

日本語環境のWindows場合、UNICODEモードと非UNICODEモードを選択できます。--unicode-modeオプションを指定した場合はUNICODEモード、指定しない場合は非UNICODEモードとなります。

■非UNICODEモードを指定する場合

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl set-lang --lang sjis
```

■UNICODEモードを指定する場合

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl set-lang --lang sjis --unicode-mode
```



■UNICODEモードについて

単位ジョブのバッチ処理をUTF-16で実行します。単位ジョブのスクリプト内でUTF-16で出力するプログラムを実行したい場合に選択してください。それ以外の場合は非UNICODEモードを選択することを推奨します。



■UNICODEモードは日本語環境のみサポートします。中国語環境または英語環境でUNICODEモード(--unicode-modeオプション指定)を設定した場合は動作保証しておりません。

■UNICODEモードの場合、単位ジョブの出力結果およびエラー出力結果が全てUTF-16となるようにしてください。UTF-16以外の文字が混在している場合、単位ジョブの実行結果が文字化けします。

指定できる言語および\$langの値の対応表は以下のとおりです。

表2.3 エージェントに設定可能な言語一覧

OS	言語	\$lang
UNIX	UTF-8	utf-8
	EUC-JP	euc
	Shift-JIS	sjis
	GB18030	gb18030
	English	english
Windows (日本語環境)	日本語 (非UNICODEモード)	sjis
	日本語 (UNICODEモード)	sjis (--unicode-mode指定)
	英語	english
Windows (中国語環境)	中国語	gb18030
	英語	english
Windows (英語環境)	英語	english

2.1.2. 言語の変更

エージェントの言語を変更する場合の手順について説明します。

変更手順は「[2.1.1 初期設定](#)」と同様です。ただし、`jcagctrl set-lang`コマンドを実行するには、全てのエージェントが停止している必要があります。事前に全てのエージェントを停止してから実施してください。エージェントの停止方法は「[2.6 サービスの起動と停止](#)」を参照してください。

`jcagctrl set-lang`コマンドを実行すると、以下のメッセージが表示されます。

```
After change language settings, will need to reconfigure the agent.
Do you want to continue? [y/N]
```

「y」を入力すると、エージェントの言語が変更されます。「N」を入力すると、変更がキャンセルされます。

2.2. インスタンス作成

エージェントのインスタンスを作成する手順について説明します。



インスタンスの作成には、事前に以下の作業を実施する必要があります。

- エージェントの言語設定
- マネージャへのエージェント登録

エージェントの言語設定の手順は、「[2.1 言語設定](#)」を参照してください。

マネージャへのエージェント登録は、JobCenter CL/Winでマネージャに接続しマネージャフレームのエージェント登録画面から行います。手順は<スタンダードモード用環境構築ガイド>の「4.1 エージェントの管理」を参照してください。

1. 秘密鍵の格納

マネージャへのエージェント登録の際にダウンロードした秘密鍵を、JobCenter AGをインストールしたマシン上からアクセスできるディレクトリに格納します。



秘密鍵は一般ユーザからアクセスできないディレクトリに格納することを推奨します。

2. spoolディレクトリの格納先作成

spoolディレクトリの格納先(空ディレクトリ)を作成します。spoolディレクトリとは、エージェントのインスタンスのデータを格納するディレクトリとなります。



- UNIX版の場合、spoolディレクトリのパーミッションは755に設定してください。
- spoolディレクトリの上位ディレクトリは、一般ユーザで読み書き可能なパスを指定してください。

3. インスタンスの作成

以下のコマンドを実行してください。

■UNIX版

```
/usr/bin/jcagctrl create --instance-name $name --endpoint $url --agent-name $agent-name --private-key $filepath --spool-dir $filepath
```

■Windows版

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl create --instance-name $name --endpoint $url --agent-name $agent-name --private-key $filepath --spool-dir $filepath
```

引数の説明は以下のとおりです。

表2.4 jcagctrl createコマンドの引数

引数	説明	設定例
--instance-name \$name	エージェントのインスタンス名を指定します。	agent1

引数	説明	設定例
	JobCenter AGをインストールしたマシン上で一意の名前を指定してください。	
--endpoint \$url	<p>接続先マネージャのURLを指定します。</p> <p>\$urlの書式は以下のとおりです。</p> <pre><httpまたはhttps>://<接続先マネージャのホスト名またはIPアドレス>:<JCEXECUTORのポート番号></pre> <p>プロトコルについて、接続先マネージャのjcexecutor_webserverのHTTPS設定を行っている場合はhttps、行っていない場合はhttpとなります。詳細は<スタンダードモード用環境構築ガイド>の「6.9 jcexecutor_webserverデーモンの動作設定について」を参照してください。</p> <p>JCEXECUTORのポート番号のデフォルト値は23151です。ポート番号を変更している場合はそのポート番号を指定してください。</p>	https://manager:23151
--agent-name \$agent-name	<p>エージェント名を指定します。</p> <p>マネージャへのエージェント登録の際に入力したエージェント名を指定してください。</p>	agent1
--private-key \$filepath	<p>秘密鍵のパスを指定します。</p> <p>手順1で実施した秘密鍵の格納先のファイルパスを指定してください。</p>	/usr/local/jcagent_private_key/rsa.key
--spool-dir \$filepath	<p>エージェントのspoolディレクトリのパスを指定します。</p> <p>手順2で作成したspoolディレクトリのパスを指定してください。</p>	/usr/spool/agent1

上記コマンドは必要最低限の引数のみ記載しています。その他の引数および引数の詳細については、<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「4.1 jcagctrl エージェントの情報を管理」のcreateサブコマンドを参照してください。

4. インスタンスの確認

手順3のjcagctrl createコマンドが成功すると、エージェントにインスタンスが登録されます。登録されたインスタンスは以下のコマンドで確認可能です。

■UNIX版

```
/usr/bin/jcagctrl list
```

■Windows版

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl list
```

jcagctrl listコマンドの実行例は以下のとおりです。

INSTANCE-NAME	INSTANCE-ID	ACTIVE	ENABLE	STATUS	AGENT-ID	AGENT-NAME	USER-GROUP	ENDPOINT
agent1	b850b57d-f5ac-4a34-a757-f18e71f0e6c9	false	false	DISCONNECTED	a7a6d98a-9a50-4ec1-a085-0184aa71c7f9	agent1	jobcenterag	https://manager:23151

作成したエージェントのインスタンスを利用するには、サービス登録とサービスの起動が必要です。サービス登録は「[2.5 サービス登録](#)」、サービスの起動は「[2.6.1 サービスの起動](#)」を参照してください。

2.3. インスタンス更新

エージェントのインスタンスの設定を更新する手順について説明します。

1. インスタンスのサービス停止

インスタンス更新は、インスタンスのサービスが停止している必要があります。

インスタンスのサービス停止手順は「[2.6.2 サービスの停止](#)」を参照してください。

2. インスタンスの更新

以下のコマンドを実行してください。

■UNIX版

```
/usr/bin/jcagctrl update --instance-name $name <変更するパラメータ>
```

■Windows版

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl update --instance-name $name <変更するパラメータ>
```

\$nameには、更新対象のインスタンス名を指定します。

<変更するパラメータ>には、変更するパラメータに対応する引数を複数指定します。変更しないパラメータについては省略可能です。



--no-verifyオプションについて、指定時はルート証明書の検証を無効、省略時は有効となるため、無効のままにしたい場合は都度指定してください。

変更可能なパラメータは以下のとおりです。パラメータの詳細については、<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「4.1 jcagctrl エージェントの情報を管理」のupdateサブコマンドを参照してください。

表2.5 jcagctrl updateコマンドで変更可能なパラメータに対応する引数

引数	説明	設定例
--endpoint \$url	接続先マネージャのURLを指定します。	https://manager:23151
--agent-id \$agent-id	エージェントIDを指定します。	a7a6d98a-9a50-4ec1-a085-0184aa71c7f9
--agent-name \$agent-name	エージェント名を指定します。	agent1
--private-key \$filepath	秘密鍵のパスを指定します。	/usr/local/jcagent_private_key/rsa.key
--spool-dir \$filepath	エージェントのspoolディレクトリのパスを指定します。	/usr/spool/agent1
--user-group \$group	エージェントのOSユーザのユーザグループ名を指定します。 指定したユーザグループがOS上に存在しない場合は、自動でユーザグループを作成します。	jobcenterag
--root-ca \$filepath	エージェントで使用するルート証明書のパスを指定します。	/usr/local/jcagent_root_ca/cacert.pem

引数	説明	設定例
--no-verify	エージェントで使用するルート証明書の検証を無効化したい場合に指定します。 有効化したい場合は、本オプションの指定をせずに実行してください。	-
--proxy \$proxy	マネージャに接続する際に使用するプロキシのURLを指定します。	https:// proxy.example.com

例えば、UNIX版でインスタンス名instance1の接続先マネージャのURLをhttps://manager-new:23151に変更する場合は、以下のように実行します。

```
/usr/bin/jcagctrl update --instance-name instance1 --endpoint https://manager-new:23151
```



■jcagctrl updateコマンドは、変更後のパラメータでマネージャへの接続確認を行います。接続できなかった場合はインスタンスの更新に失敗します。

■jcagctrl updateコマンドは、エージェントのインスタンスの情報を更新します。マネージャに登録されているエージェント情報は更新されない点にご注意ください。

例えば、インスタンス名instance1のエージェント名をagent1からagent2に変更する場合、マネージャに登録されたエージェントagent2のインスタンスがinstance1に変更されることになります。マネージャにagent2が登録されていない場合、エージェントからマネージャへの接続に失敗し、インスタンスの更新に失敗します。

3. インスタンスの設定の確認

インスタンスの設定が正しく更新されたか確認します。以下のコマンドで対象のパラメータが変更されていることを確認してください。

■UNIX版

```
/usr/bin/jcagctrl list --format=json --pretty-print
```

■Windows版

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl list --format=json --pretty-print
```



エージェントのインスタンスの全パラメータを確認するには、JSON形式(--format json)で表示する必要があります。

jcagctrl listコマンドの実行例は以下のとおりです。

```
[
  {
    "instance-name": "agent1",
    "instance-id": "619bca8e-0a55-457c-8bd1-37444d53a00a",
    "agent-id": "a7a6d98a-9a50-4ec1-a085-0184aa71c7f9",
    "agent-name": "agent1",
    "endpoint": "http://manager:23151",
    "private-key": "/usr/local/jcagent_private_key/rsa.key",
    "spool-dir": "/usr/spool/agent1",
    "group": "jobcenterag",
    "root-ca": null,
    "no-verify": false,
```

```
"proxy": null,  
"enable": true,  
"active": true,  
"status": "CONNECTED"  
}  
]
```

4. インスタンスのサービス起動

インスタンスの設定が正しく更新されたことを確認できたら、インスタンスのサービスを起動します。

インスタンスのサービス起動手順は「[2.6.1 サービスの起動](#)」を参照してください。

2.4. インスタンス削除

エージェントのインスタンスを削除する手順について説明します。

1. インスタンスのサービス停止

インスタンス削除は、インスタンスのサービスが停止している必要があります。

インスタンスのサービス停止手順は「[2.6.2 サービスの停止](#)」を参照してください。

2. インスタンスのサービス解除

以下のコマンドを実行してください。

■UNIX版

```
/usr/bin/jcagctrl disable --instance-name $name
```

■Windows版

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl disable --instance-name $name
```

\$nameには、エージェントのインスタンス名を指定します。

3. インスタンスの削除

以下のコマンドを実行してください。

■UNIX版

```
/usr/bin/jcagctrl delete --instance-name $name
```

■Windows版

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl delete --instance-name $name
```

\$nameには、エージェントのインスタンス名を指定します。

4. インスタンスの削除確認

インスタンスが削除されたことを確認します。以下のコマンドで確認可能です。

■UNIX版

```
/usr/bin/jcagctrl list
```

■Windows版

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl list
```

対象のインスタンスが表示されなければ、正常にインスタンスが削除されています。エージェントのspoolディレクトリは削除されませんので、不要であれば削除してください。

2.5. サービス登録

エージェントのインスタンスのサービスを登録する手順について説明します。

1. インスタンスのサービス登録

以下のコマンドを実行してください。

■UNIX版

```
/usr/bin/jcagctrl enable --instance-name $name
```

■Windows版

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl enable --instance-name $name
```

\$nameには、エージェントのインスタンス名を指定します。

2. インスタンスの確認

手順1のjcagctrl enableコマンドが成功すると、エージェントのインスタンスのサービスがOSに登録されます。以下のコマンドで確認可能です。

■UNIX版

```
/usr/bin/jcagctrl list
```

■Windows版

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl list
```

実行結果のENABLE列がtrueとなっていれば、正常にサービス登録されています。jcagctrl listコマンドの実行例は以下のとおりです。

INSTANCE-NAME	INSTANCE-ID	ACTIVE	ENABLE	STATUS	AGENT-ID	AGENT-NAME	USER-GROUP	ENDPOINT
agent1	b850b57d-f5ac-4a34-a757-f18e71f0e6c9	false	true	DISCONNECTED	a7a6d98a-9a50-4ec1-a085-0184aa71c7f9	agent1	jobcenterag	https://manager:23151

2.6. サービスの起動と停止

エージェントのサービスの起動と停止、およびサービスの状態を確認する手順について説明します。



サービスの起動と停止には、事前に以下の作業を実施する必要があります。

■エージェントのサービス登録

エージェントのサービス登録の手順は、「[2.5 サービス登録](#)」を参照してください。

2.6.1. サービスの起動

エージェントのサービス起動はjcagctrl startコマンドで行います。以下のコマンドを実行してください。

■UNIX版

```
/usr/bin/jcagctrl start --instance-name $name
```

■Windows版

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl start --instance-name $name
```

\$nameには、エージェントのインスタンス名を指定します。

2.6.2. サービスの停止

エージェントのサービス停止はjcagctrl stopコマンドで行います。以下のコマンドを実行してください。

■UNIX版

```
/usr/bin/jcagctrl stop --instance-name $name
```

■Windows版

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl stop --instance-name $name
```

\$nameには、エージェントのインスタンス名を指定します。

2.6.3. サービスの状態確認

エージェントのサービスの状態はjcagctrl listコマンドで確認できます。以下のコマンドを実行してください。

■UNIX版

```
/usr/bin/jcagctrl list
```

■Windows版

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl list
```

実行結果のACTIVE列がtrueとなっていれば起動中、falseとなっていれば停止中となります。jcagctrl listコマンドの実行例は以下のとおりです。

INSTANCE-NAME	INSTANCE-ID	ACTIVE	ENABLE	STATUS	AGENT-ID	AGENT-NAME	USER-GROUP	ENDPOINT
agent1	b850b57d-f5ac-4a34-a757-f18e71f0e6c9	true	true	CONNECTED	a7a6d98a-9a50-4ec1-a085-0184aa71c7f9	agent1	jobcenterag	https://manager:23151

2.6.4. OSのシャットダウンに関する注意事項

Windowsをシャットダウンする際、JobCenter AGの終了処理が完了する前に、Windowsから強制的にJobCenter AGの各プロセスが終了されてしまうことがあります。その結果、JobCenter AGの正常動作を保証できなくなる可能性があります。

(例) エージェントに転送されているリクエスト情報が失われてしまう

これを回避するには、あらかじめJobCenter AGのサービスを停止してからWindowsをシャットダウンする必要があります。簡単で確実な方法は、WindowsのシャットダウンスクリプトでJobCenter AGのサービスの停止処理を行うことです。グループポリシーエディタ(gpedit.msc)を起動し、以下の操作でJobCenter AGのサービスの停止を行うスクリプトを追加してください。

コンピュータの構成→Windowsの設定→スクリプト

JobCenter AGのサービスの停止スクリプトは、通常のバッチファイルを作成し、サービス起動しているすべてのインスタンスに対して下記のコマンドを記述してください。

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl stop --instance-name <インスタンス名>
```



%InstallDirectory% はJobCenter AGのインストールディレクトリのパスです。デフォルトのインストールディレクトリパスはC:\Program Files\JobCenter\Agentです。

2.7. OSユーザ登録

エージェントで使用するOSユーザの登録手順について説明します。

1. OSユーザ作成

JobCenter AGをインストールしたマシン上に、エージェントで使用するOSユーザを作成します。

2. OSユーザ登録

以下のコマンドを実行してください。

■UNIX版

```
/usr/bin/jcagctrl add-user --instance-name $name --user-name $user
```

■Windows版

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl add-user --instance-name $name --user-name $user
```

\$nameには、エージェントのインスタンス名を指定します。

\$userには、登録するOSユーザ名を指定します。

jcagctrl add-userコマンドに成功すると、OSユーザが所属するユーザグループに、エージェントのインスタンスに設定したユーザグループが登録されます。



エージェントで使用するOSユーザは、インスタンスに設定したユーザグループに所属しているかで判定しています。そのため、複数のインスタンスでユーザグループの設定が重複している場合、jcagctrl add-userコマンドで指定したインスタンス以外にも、ユーザグループが同じインスタンス全てに登録されることとなります。

インスタンスごとに登録するOSユーザを区別したい場合は、「[2.2 インスタンス作成](#)」または「[2.3 インスタンス更新](#)」で--user-group/パラメータに異なるユーザグループを指定してください。



Windows版の場合、ユーザグループにバッチ処理実行に必要な以下の権限が自動で付与されません。

権限	意味
SeInteractiveLogonRight	バッチジョブとしてログオン
SeBatchLogonRight	ローカルログオン

3. OSユーザの登録確認

OSユーザが登録されたことを確認します。以下のコマンドで確認可能です。

■UNIX版

```
/usr/bin/jcagctrl list-user --instance-name $name
```

■Windows版

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl list-user --instance-name $name
```

\$nameには、エージェントのインスタンス名を指定します。

UNIX版のjcagctrl list-userコマンドの実行例は以下のとおりです。

NAME	UID
user1	1000

Windows版のjcagctrl list-userコマンドの実行例は以下のとおりです。

NAME	DOMAIN	SID
user1	domain1	S-1-5-21-2644628043-2395542531-2746206096-1005



Windows版の場合、ドメインユーザはDOMAIN列にドメイン名が表示されます。ローカルユーザは空欄となります。

ここで登録したOSユーザが、単位ジョブ等のバッチ処理を実行するOSユーザの候補になります。本作業の実施後、マネージャ側でユーザマッピング設定を行う必要があります。ユーザマッピングの設定手順は<スタンダードモード用環境構築ガイド>の「4.2 ユーザマッピング」を参照してください。

2.8. OSユーザ登録解除

エージェントで使用するOSユーザの登録解除手順について説明します。

1. OSユーザ登録解除

以下のコマンドを実行してください。

■UNIX版

```
/usr/bin/jcagctrl del-user --instance-name $name --user-name $user
```

■Windows版

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl del-user --instance-name $name --user-name $user
```

\$nameには、エージェントのインスタンス名を指定します。

\$userには、登録解除するOSユーザ名を指定します。

jcagctrl del-userコマンドに成功すると、エージェントのインスタンスに設定したユーザグループから指定したOSユーザが削除されます。



エージェントで使用するOSユーザは、インスタンスに設定したユーザグループに所属しているかで判定しています。そのため、複数のインスタンスでユーザグループの設定が重複している場合、jcagctrl del-userコマンドで指定したインスタンス以外にも、ユーザグループが同じインスタンス全てが登録解除されることとなります。

インスタンスごとに登録するOSユーザを区別したい場合は、「[2.2 インスタンス作成](#)」または「[2.3 インスタンス更新](#)」で--user-groupパラメータに異なるユーザグループを指定してください。

2. OSユーザの登録解除確認

OSユーザが登録解除されたことを確認します。以下のコマンドで確認可能です。

■UNIX版

```
/usr/bin/jcagctrl list-user --instance-name $name
```

■Windows版

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl list-user --instance-name $name
```

\$nameには、エージェントのインスタンス名を指定します。

対象のOSユーザが表示されなければ、正常にOSユーザの登録が解除されています。

3. エージェントの運用

本章では、エージェントの動作設定の変更やバックアップ・復元などのエージェントに関する運用について説明します。

3.1. エージェントの動作設定変更

エージェントの動作設定は設定ファイルによって行います。エージェントの設定ファイルはインスタンス作成時に指定したspool-dirのディレクトリ配下の以下の場所に格納されます。

```
jcexecutor/agent/jcexecutor_agent.yaml
```



jcagctrl create コマンドによってインスタンスを作成したときに自動的に設定ファイルが作成されます。



設定ファイルの変更内容をエージェントに反映するためにはエージェントを再起動する必要があります。このため設定変更時は必ずエージェントを再起動して下さい。エージェントの停止・起動方法については2章「[エージェントの環境構築](#)」を参照してください。

3.1.1. エージェントの設定一覧

設定ファイルに設定できるパラメータは以下の通りです。



タイムアウトの設定やデバッグログの設定といった設定については通常デフォルト値のままとしていただいて問題ありません。

表3.1 エージェントの設定ファイルのパラメーター一覧

パラメータ			説明
debug			デバックモードの有効/無効を設定します。 本パラメータは必ず設定する必要があります。 設定可能な値は以下です。 ■ true 有効にします。 ■ false 無効にします。 デフォルト値は false です。 有効の場合には、ログにデバッグログを出力します。
websocket	timeout	keepAlive	websocketのpingフレームを送る送信間隔を指定します。 本パラメータは必ず設定する必要があります。 値の範囲は 1~3600 で単位は秒です。 デフォルト値は 30 です。
		pongWait	websocketのpongフレームの待ち時間を指定します。 本パラメータは必ず設定する必要があります。 値の範囲は 1~3600 で単位は秒です。

パラメータ			説明
			デフォルト値は 60 です。
		writeWait	<p>メッセージ送信のタイムアウト時間を指定します。</p> <p>本パラメータは必ず設定する必要があります。</p> <p>値の範囲は 1～3600 で単位は秒です。</p> <p>デフォルト値は 10 です。</p>
		handshake	<p>コネクション確立時のハンドシェイクのタイムアウト時間を指定します。</p> <p>本パラメータは必ず設定する必要があります。</p> <p>値の範囲は 1～3600 で単位は秒です。</p> <p>デフォルト値は 45 です。</p>
	connectRetryInterval	<p>WebSocketの接続リトライの間隔を指定します。</p> <p>本パラメータは必ず設定する必要があります。</p> <p>値の範囲は 1～3600 で単位は秒です。</p> <p>デフォルト値は 30 です。</p>	
api	timeout	keepAlive	<p>HTTPキープライブで定期的送信するパケットの間隔を指定します。</p> <p>本パラメータは必ず設定する必要があります。</p> <p>値の範囲は 1～3600 で単位は秒です。</p> <p>デフォルト値は 30 です。</p>
		idleConnTimeout	<p>HTTPキープアライブで使用されていないコネクションのタイムアウト時間を指定します。</p> <p>本パラメータは必ず設定する必要があります。</p> <p>値の範囲は 1～3600 で単位は秒です。</p> <p>デフォルト値は 60 です。</p>
		handshake	<p>コネクション確立時のハンドシェイクのタイムアウト時間を指定します。</p> <p>本パラメータは必ず設定する必要があります。</p> <p>値の範囲は 1～3600 で単位は秒です。</p> <p>デフォルト値は 45 です。</p>
log	errorLog	maxSize	<p>エラーログファイルの 1 ファイルの最大サイズ (MB)を設定します。</p> <p>本パラメータは必ず設定する必要があります。</p> <p>最大サイズ(MB)は 4～100 の範囲で設定できます。</p>

パラメータ			説明
			デフォルト値は 4 です。
		maxBackups	<p>エラーログファイルのバックアップ数を設定します。</p> <p>本パラメータは必ず設定する必要があります。</p> <p>バックアップ数は 1~10 の範囲で設定できます。</p> <p>デフォルト値は 10 です。</p> <p>設定したバックアップ数よりも古いログファイルは自動的に削除されます。</p>
request	onStartup	action	<p>エージェントの停止時に実行中だったリクエストの再実行に関する動作を設定します。</p> <p>設定可能な値は以下です。</p> <p>■ default</p> <p>リクエストのリスタートの設定にしたがって動作します。</p> <p>■ abort</p> <p>リクエストのリスタートの設定を無視して異常終了させます。</p> <p>■ pause</p> <p>リクエストの実行処理を一時的に停止した状態でエージェントを起動します。詳細は「3.1.4.2 再起動時にリクエスト実行処理を停止した状態で起動する」を参照してください。</p> <p>未設定の場合には default がデフォルト値になります。</p>
	restart	resultAppend	<p>エージェント再起動時のリクエスト再実行における出力結果の追記の有効/無効を指定します。</p> <p>設定可能な値は以下です。</p> <p>■ true</p> <p>有効にする。</p> <p>■ false</p> <p>無効にする。</p> <p>デフォルト値は true です。</p> <p>無効の場合には出力結果を上書きします。この場合エージェントの停止前の出力結果を後から確認することはできません。</p>
	environment	export	path

パラメータ			説明
			<p>設定可能な値は以下です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ default エージェントの環境に合わせて自動的に値を設定します。 ■ manager マネージャ側のリクエスト実行時の環境変数 PATH の値を使用します。 <p>未設定の場合には default がデフォルト値になります。</p> <p>エージェントの環境に合わせて自動的に設定する値については<スタンダードモード用環境構築ガイド>の14章 「ジョブ実行時の環境変数の取り扱い」を参照してください。</p>
	userProfile		<p>エージェント全体の設定としてリクエスト実行時のユーザプロファイルの読み込みの有効/無効を指定します。</p> <p>設定可能な値は以下です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ true 有効にする。 ■ false 無効にする。 <p>デフォルト値は true です。</p> <p>本設定はWindowsでのみ有効です。Linuxの場合は動作に影響しません。</p>
	userEnvironment		<p>エージェント全体の設定としてリクエスト実行時のユーザ環境変数の読み込みの有効/無効を指定します。</p> <p>設定可能な値は以下です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ true 有効にする。 ■ false 無効にする。 <p>デフォルト値は true です。</p> <p>本設定はWindowsでのみ有効です。Linuxの場合は動作に影響しません。</p>

パラメータ		説明
	userSetting	<p>リクエスト実行時のユーザプロフィールとユーザ環境変数の読み込みの有効/無効をユーザ毎に個別に指定します。</p> <p>本設定はエージェント全体としての設定より優先されます。</p> <p>本設定はWindowsでのみ有効です。Linuxの場合は動作に影響しません。</p>
	userName	<p>対象のユーザ名を指定します。</p> <p>ドメインユーザの場合はドメイン\ユーザ名の形式で指定します。</p>
	userProfile	<p>リクエスト実行時のユーザプロフィールの読み込みの有効/無効を指定します。</p> <p>設定可能な値は以下です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ true 有効にする。 ■ false 無効にする。 <p>デフォルト値は true です。</p>
	userEnvironment	<p>リクエスト実行時のユーザ環境変数の読み込みの有効/無効を指定します。</p> <p>設定可能な値は以下です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ true 有効にする。 ■ false 無効にする。 <p>デフォルト値は true です。</p>
	clearUserToken	<p>リクエスト実行時に使用するユーザトークン情報のキャッシュの動作を設定します。</p> <p>設定可能な値は以下です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ never 常にキャッシュを利用する。 ■ always キャッシュを利用せず、常にユーザトークンの取得を行う。 <p>未設定の場合には never がデフォルト値になります。</p>

パラメータ		説明
		本設定はWindowsでのみ有効です。Linuxの場合は動作に影響しません。
	temporary ResultFile	maxSize
		<p>エージェント側で保持する出力結果ファイルの合計サイズの上限を指定します。</p> <p>値の範囲は 0～1000000 で単位は(MB)です。</p> <p>デフォルト値は 0 です。</p> <p>1以上の値が指定された場合、保持している出力結果ファイルの合計サイズが指定値を超過した場合、古いファイルから削除されます。</p> <p>0が指定された場合、上限はなしとなります。</p> <p>エージェント側で保持する出力結果ファイルについては「3.1.7 巨大な出力結果の退避によるディスク使用量を制限する」を参照してください。</p>
	sendResult	maxSendSizeAtOnce
		<p>リクエストの出力結果をマネージャに一度に送信できるデータサイズの上限を指定します。</p> <p>値の範囲は 0～100 で単位は(MB)です。</p> <p>デフォルト値は 10 です。</p> <p>一度にマネージャに送信するデータサイズが上限を超えた場合は、複数回に分割して送信します。</p>
		sendInterval
		<p>リクエストの出力結果をマネージャに送信する間隔を指定します。</p> <p>値の範囲は 1～3600 で単位は秒です。</p> <p>デフォルト値は 60 です。</p>
timeout	boot	<p>エージェントの起動のタイムアウトを設定します。</p> <p>本パラメータは必ず設定する必要があります。</p> <p>値の範囲は 1～3600 で単位は秒です。</p> <p>デフォルト値は 300 です。</p>
filecheck	confirmClose	<p>ファイル待ち合わせ部品で通過条件が「存在する」または「更新」の場合の追加条件の有効/無効を指定します。</p> <p>設定可能な値は以下です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ true 有効にします。 ■ false 無効にします。 <p>デフォルト値は false です。</p>

パラメータ	説明
	<p>有効とした場合、通過条件を満たした際に対象のファイルが他プロセスによってオープンされているかを確認します。</p> <p>このとき対象ファイルが他プロセスによってオープンされていない場合に待ち合わせを終了します。</p>
confirmNoUpdate	<p>ファイル待ち合わせ部品で通過条件が「存在する」または「更新」の場合の追加条件の有効/無効を指定します。</p> <p>設定可能な値は以下です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ true 有効にします。 ■ false 無効にします。 <p>デフォルト値は false です。</p> <p>有効とした場合、通過条件を満たした際に一定時間の間に対象のファイルが更新されているかを確認します。</p> <p>このとき noUpdateTime の設定値以上の時間更新されていない場合に待ち合わせを終了します。</p>
noUpdateTime	<p>confirmNoUpdateが有効の場合に確認する時間を指定します。</p> <p>confirmNoUpdateが無効の場合は本パラメータの設定は無視されます。</p> <p>値の範囲は 1～300 で単位は秒です。</p> <p>デフォルト値は 30 です。</p>

3.1.2. マネージャへの接続のリトライ間隔を変更する

エージェントは起動時にマネージャに対してWebSocket接続を行い、この接続によってマネージャからのリクエスト実行指示を受け付けます。

このため、WebSocketの接続が切断されている間はマネージャからエージェントに対して新たにリクエストを実行することができません。

WebSocket接続は一度確立した後、基本的には切断されることはありませんが、マネージャの再起動が発生した場合などに一時的に切断される可能性があります。

WebSocket接続が切断された場合、エージェントは即座に再接続を試みます。このとき接続に失敗すると、以降は一定間隔でマネージャへの接続リトライを行います。

このため、マネージャが再起動して接続が切断された後、エージェントとの接続が回復してマネージャからのリクエスト実行が再開されるまで、最大でリトライの間隔分の時間がかかる可能性があります。

この時間を短くしたい場合などに、エージェントの設定ファイル (jcexecutor_agent.yaml) でconnectRetryIntervalの値を変更することでリトライ間隔を変更できます。

以下は、エージェントの設定ファイル (jcexecutor_agent.yaml) でリトライ間隔を20秒とする場合のサンプルです。なお設定ファイルのうち一部のパラメータのみの抜粋となりますのでご注意ください。

```
websocket:
  timeout:
    keepAlive: 30
    pongWait: 60
    writeWait: 10
    handshake: 45
  connectRetryInterval: 20
```



エージェントの接続リトライの間隔を短くしすぎるとマネージャを長時間停止する場合などに不要な通信が多く発生することになります。またこの場合リトライ毎に接続失敗の旨のログが出続けることとなりますので、必要なログが流れてしまうなどの可能性があります。

3.1.3. ログサイズ、世代数を変更する

エージェントのログはspool-dirのディレクトリ配下の以下の場所に格納されます。

```
log/jcexecutorAgent.log
```

ログのサイズや保持する世代数を変更したい場合、エージェントの設定ファイル (jcexecutor_agent.yaml) でlog.errorLogのmaxSizeやmaxBackupsの指定値を変更します。

以下は、エージェントの設定ファイル (jcexecutor_agent.yaml) でログのサイズを10(MB)、世代数を5とする場合のサンプルです。なお設定ファイルのうち一部のパラメータのみの抜粋となりますのでご注意ください。

```
log:
  errorLog:
    maxSize: 10
    maxBackups: 5
```

3.1.4. 再起動時の動作を変更する

エージェントは停止時に実行中のすべてのリクエストを停止してから終了します。

また停止したリクエストはエージェントの再起動時に、リクエストのリスタート設定にしたがって動作します。



リクエストのリスタート設定は、リクエストに紐づく単位ジョブのパラメータのリスタートの設定値となります。単位ジョブのリスタートの設定については<スタンダードモード用基本操作ガイド>の「4.2.2.5 [その他] タブ」を参照してください。

■ ENABLE

リクエストを再実行します。この場合リクエストのバッチ処理を最初からやりなおします。

■ DISABLE

リクエストを異常終了扱いとしてマネージャに通知します。この場合リクエストに紐づく単位ジョブは異常終了となります。

またエージェント停止前に出力されていたリクエストの結果は削除せずに保持します。このため、再実行後のリクエストの出力結果は以下のような区切り文字の後に追記されます。

```
=====< JNW RERUN YYYYMMDDThhmmssZ >===== Request Restarted
```



実際の出力では YYYYMMDD は年月日、hhmmss は時分秒に置きかわります。

3.1.4.1. 再起動時に全てのリクエストを終了する

エージェント再起動時に全てのリクエストを再実行したくない場合、エージェントの設定ファイル (jcexecutor_agent.yaml) で **request.onStartup.action** を `abort` と設定することで全てのリクエストを異常終了扱いとする動作となります。

この場合リクエストのリスタート設定は無視されます。

以下は、エージェントの設定ファイル (jcexecutor_agent.yaml) で設定を行う場合のサンプルです。なお設定ファイルのうち一部のパラメータのみの抜粋となりますのでご注意ください。

```
request:
  onStartup:
    action: abort
```

3.1.4.2. 再起動時にリクエスト実行処理を停止した状態で起動する

エージェント再起動時にリクエストの実行を一時的に停止しておきたい場合、エージェントの設定ファイル (jcexecutor_agent.yaml) で **request.onStartup.action** を `pause` に設定することで、リクエストの再実行および新規に投入されたリクエストを一時的に停止する動作となります。

以下は、エージェントの設定ファイル (jcexecutor_agent.yaml) で設定を行う場合のサンプルです。なお設定ファイルのうち一部のパラメータのみの抜粋となりますのでご注意ください。

```
request:
  onStartup:
    action: pause
```

上記の設定でエージェントを起動すると、エージェントのステータスはPAUSEという状態になります。以降の節で本設定を利用する代表的なケースおよび手順例について説明します。

3.1.4.2.1. 本設定を利用する代表的なケース

障害復旧後にエージェントを起動する際、障害によるエージェント停止時に実行中だったリクエストについて、障害の状況を踏まえて特定のリクエストのみ再開したい時など、リクエスト毎に個別で再開の有無を制御したい場合があります。

しかし、エージェント側で実行中だったリクエストは、マネージャとエージェントとのリクエスト情報の整合性を保つために、エージェントが停止している場合は削除できない仕様となっています。

このような場合にエージェントをPAUSEの状態での起動することにより、リクエストの実行処理を一時的に停止した状態でエージェントが起動されるため、リクエストの実行処理を停止したままマネージャからエージェント上の不要なリクエストを削除できるようになります。

また、エージェントに対して「再開」操作を行うことでリクエストの実行処理を再開できるため、エージェント停止時に実行中だったリクエストのうち不要なリクエストだけを削除して、必要なリクエストのみを再開させることで、リクエスト毎の再開有無の制御が実現できます。



■ PAUSE中のエージェントに新規リクエストを投入した場合、そのリクエストも実行されずに停止した状態となります。

■ リクエストのリスタート設定がDISABLEとなっているリクエストは、エージェントが再起動した時点で異常終了扱いとなります。

リクエストのリスタート設定は、部品のパラメータ「リスタート」で行います。詳細は<スタンダードモード用基本操作ガイド>の「4.2.2.5 [その他] タブ」を参照してください。

- エージェント停止時に既に実行が完了しており、マネージャへの結果転送中であったリクエストは、停止せずに結果の返送処理から再開します。このため、PAUSE中であっても後続のジョブが実行される可能性があることにご注意ください。

確実に後続のジョブを実行したくない場合、対象のジョブの後続ジョブを事前に保留していただくなどの対応が必要となります。

3.1.4.2.2. マシンの障害復旧後からエージェントの動作の再開までの手順例

以下の状況を例に、マシンの障害復旧後からエージェントの動作の再開までの手順例について説明します。

- エージェント(エージェント名およびインスタンス名 : jobagent1)のマシン上で障害が発生し、jobagent1を停止した
- マネージャ(サイト名 : jobmanager)およびjobagent1以外のエージェントは正常稼働している



本節のコマンド例に記載されている %InstallDirectory% は、以下に読み替えてください。

- 作業するマシンがマネージャ(jobmanager)の場合
JobCenter MGのインストールパス
- 作業するマシンがエージェント(jobagent1)の場合
JobCenter AGのインストールパス

最初に以下の手順でjobagent1をPAUSEの状態に起動します。この作業はjobagent1のマシン上で実施してください。また、Linux環境の場合はrootユーザ、Windows環境の場合はAdministrators権限を持つユーザで実施してください。

1. jobagent1をPAUSEの状態に起動する設定を行います。

jobagent1の設定ファイルjccexecutor_agent.yamlをテキストエディタで開き、**request.onStartup**の**action**を pause に設定します。

以下は設定例となります。なお、設定ファイルのうち一部のパラメータのみの抜粋となりますのでご注意ください。

```
request:
  onStartup:
    action: pause
```

2. jobagent1を起動します。

以下のコマンドを実行します。

- Linuxの場合

```
/usr/bin/jcagctrl start --instance-name jobagent1
```

- Windowsの場合

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl start --instance-name jobagent1
```

jcagctrl startコマンドの詳細は<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「4.1 jcagctrl エージェントの情報を管理」を参照してください。

3. jobagent1がPAUSEの状態では起動しているか確認します。

以下のコマンドを実行します。

■Linuxの場合

```
/usr/bin/jcagctrl list
```

■Windowsの場合

```
%InstallDirectory%\bin\jcagctrl list
```

jcagctrl listコマンドの詳細は<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「4.1 jcagctrl エージェントの情報を管理」を参照してください。

以下は出力例となります。エージェント名およびインスタンス名がjobagent1のSTATUS列を確認し、PAUSEであることを確認してください。(表示の都合上、一部パラメータの記載を省略しています)

INSTANCE-NAME	INSTANCE-ID	ACTIVE	ENABLE	STATUS	...
jobagent1	f388a92c-77e9-4c3d-8cef-4085f2f4f90f	true	true	PAUSE	...
:					

以上でjobagent1の作業は完了です。

次に、エージェント停止時に実行中だったリクエストのうち不要なリクエストの削除を行います。以下の作業はjobmanagerのマシン上で実施してください。また、JobCenter管理者ユーザで実施してください。

1. 不要なリクエストを削除します。

CL/WinでJobCenter管理者でjobmanagerに接続し、マネージャフレームの[トラッカー一覧@全マシン]タブから、jobagent1に投入したリクエストを含むトラックを確認し対処を行ってください。

例えば、そのトラック全体の実行を中止したい場合は「スキップ」を実行すると、トラックフロー上の全ての部品の実行がキャンセルされ、jobagent1が停止する前に実行中だったリクエストは強制終了(削除)されます。

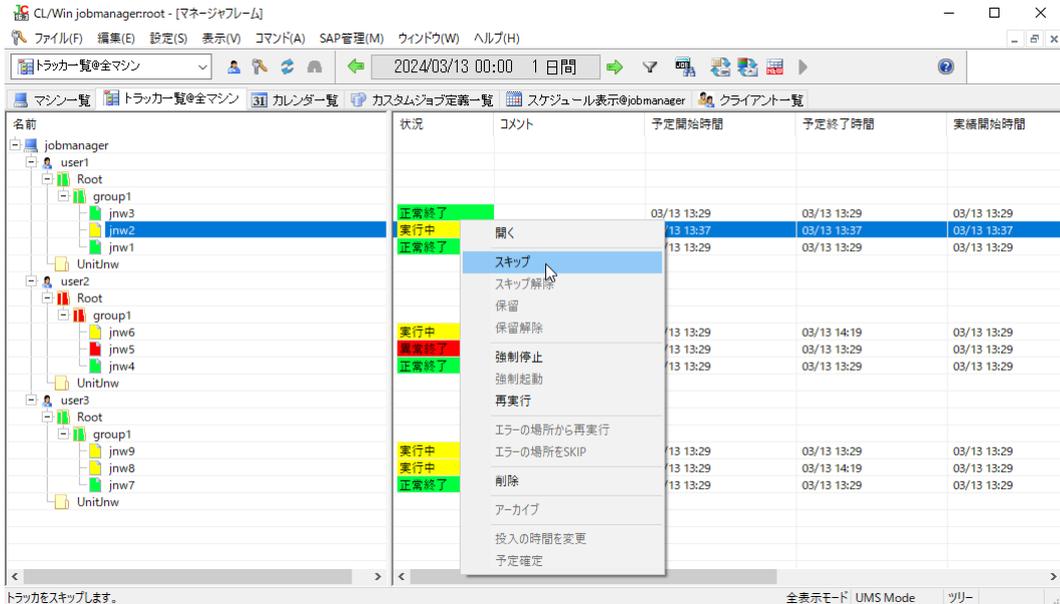


図3.1 [トラッカー一覧@全マシン]画面のトラックのスキップ操作



jobagent1に投入したリクエストを含むトラックであるか判断が難しい場合は、リクエストIDから該当のトラックを特定可能です。確認方法は以下の通りです。

a. jobagent1に投入したリクエストのリクエストIDを確認します。

確認方法は以下の通りです。

■CL/Winで確認する場合

[エージェント一覧]画面からjobagent1をダブルクリックすると、jobagent1に投入したリクエスト一覧を表示できます。リクエスト一覧画面の[リクエストID]列にリクエストIDが表示されます。

リクエスト名	状態	ユーザ名	キュー名	実行優先度	リクエストID
JOB1	STANDBY	user1	jobagent1@jo...	31	28
JOB3	RUNNING	user1	jobagent1@jo...	31	27
JOB2	RUNNING	user1	jobagent1@jo...	31	26

図3.2 [リクエスト一覧]画面

■ コマンドで確認する場合

以下のコマンドを実行します。jobmanagerのマシン上で実施してください。

■ Linuxの場合

```
/usr/lib/nqs/jcexecutor/jcexecctrl request list --agent-name jobagent1 --pretty-print
```

■ Windowsの場合

```
%InstallDirectory%\bin\jcexecutor\jcexecctrl request list --agent-name jobagent1 --pretty-print
```

jcexecctrl request listコマンドの詳細は<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「3.33 jcexecctrl スタンダードモードのリソース参照・操作」を参照してください。

以下は出力例となります。legacy_idの値の数値がリクエストIDとなります。(表示の都合上、一部パラメータの記載を省略しています)

```
{
  "result": "Success",
  "error": {
    "has_error": false,
    "code": 0,
    "message": "",
    "reason": ""
  },
  "items": [
    {
      "id": "655982e7-738f-4aa2-b47d-1bb820b69e57",
      "legacy_id": "28",
      "name": "JOB1",
      "queue_id": "00c75340-ab7f-4af0-a76d-15085e3ab546",
      "queue_name": "jobagent1@jobagent1",
      "user": "user1",
      "priority": 31,
      "hold": false,

```

```

    "restart": true,
    "status": "STANDBY",
    "agent_id": "2e7a1de4-b4be-4c70-a184-1f91803c009a",
    "agent_name": "jobagent1",
    "shell": "",
    "script": "/usr/spool/nqs/users/user1/.../JOB1.s",
    "stdout": "/usr/spool/nqs/users/user1/.../JOB1.o",
    "stderr": "/usr/spool/nqs/users/user1/.../JOB1.e",
    "job_type": "NORMAL",
    "process_info": {
      "pid": 0,
      "ppid": 0,
      "exitcode": 0
    }
  },
  :

```

- b. リクエストIDから該当のトラックを特定します。

リクエストIDから該当のトラックを特定するには、jnwsuammaryコマンドのCSV形式(**-p format=csv**)を利用します。jnwsuammaryコマンドの詳細は<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「3.1 jnwsuammary ジョブネットワーク実行実績を出力」を参照してください。

例えば、以下のコマンドを実行すると、jobmanagerの全ユーザの実行中トラックの部品情報を表示できます。jobmanagerのマシン上で実施してください。

■Linuxの場合

```
/usr/lib/nqs/gui/bin/jnwsuammary -a -j run -p format=csv,style=1,uonly
```

■Windowsの場合

```
%InstallDirectory%\bin\jnwsuammary -a -j run -p format=csv,style=1,uonly
```

以下は出力例となります。(表示の都合上、一部パラメータの記載を省略しています)

```

:
#TYPE=UNITJOB
type,parentjnw,jnwdate,name,starttime, ... ,status,exitcode,errcode,requestid,machine
UNITJOB,jnw2,20240313075906,JOB1,2024/03/13
16:59:06, ... ,submit,0,0,28.jobmanager,-
:

```

requestid列にリクエストIDが出力されます。ただし、jnwsuammaryコマンドのrequestid列の書式は<リクエストID>.<マネージャ名>となりますのでご注意ください。上記の例では**28.jobmanager**のうち**28**の部分が事前に確認したリクエストIDとなります。

トラックIDは<parentjnw列の値>.<jnwdate列の値>となります。上記の例では**jnw2.20240313075906**がトラックIDとなります。

コマンドの出力結果をファイルに保存し、リクエストIDをキーワードにgrepコマンドやExcel等で検索して、該当のトラックIDを確認してください。

トラッカIDの確認後、マネージャフレームの[トラッカー一覧@全マシン]タブで対象のトラッカを確認します。メニューバーの[表示]にある[リスト表示項目]から[トラッカID]にチェックを入れると、トラッカID列を表示可能です。

名前	状況	トラッカID	コスト	予定開始時間	予定終了時間
jobmanager					
user1					
Root					
group1					
jnw3	正常終了(アーク)	jnw6.20240313042937		03/13 13:29	03/13 13:29
jnw2	実行中	jnw2.20240313075906		03/13 16:59	03/13 16:59
jnw1	正常終了(アーク)	jnw2.20240313042912		03/13 13:29	03/13 13:29
UnitInw					
user2					
Root					
group1					
jnw6	正常終了(アーク)	jnw6.20240313042937		03/13 13:29	03/13 14:15
jnw5	正常終了(アーク)	jnw5.20240313042931		03/13 13:29	03/13 13:25
jnw4	正常終了(アーク)	jnw4.20240313042927		03/13 13:29	03/13 13:25
UnitInw					
user3					
Root					
group1					
jnw9	正常終了(アーク)	jnw9.20240313042950		03/13 13:29	03/13 13:25
jnw8	正常終了(アーク)	jnw8.20240313042946		03/13 13:29	03/13 14:15
jnw7	正常終了(アーク)	jnw7.20240313042942		03/13 13:29	03/13 13:25
UnitInw					

図3.3 [トラッカID]列を表示した状態の[トラッカー一覧@全マシン]画面

不要なリクエストの削除完了後、jobagent1の一時停止を解除してリクエストの実行処理を再開させます。引き続きjobmanagerのマシン上で実施してください。また、JobCenter管理者ユーザで実施してください。

1. jobagent1の一時停止を解除してリクエストの実行処理を再開させます。

操作方法は以下の通りです。

■CL/Winで実行する場合

[エージェント一覧]画面からjobagent1を右クリックし、[エージェント再開]を実行します。

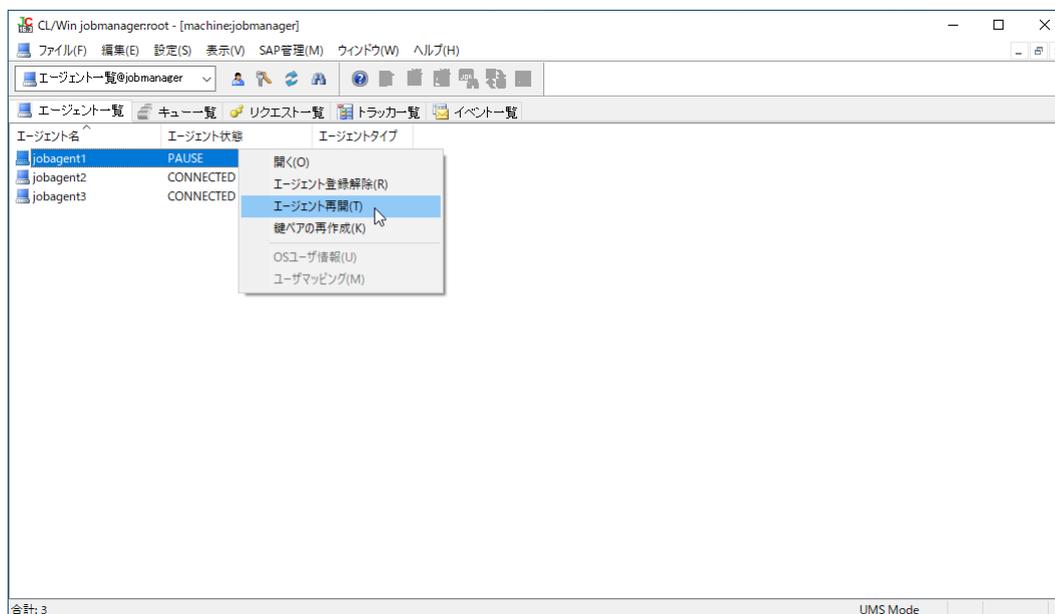


図3.4 [エージェント一覧]画面のエージェント再開操作

■コマンドで実行する場合

以下のコマンドを実行します。

■ Linuxの場合

```
/usr/lib/nqs/jcexecutor/jcexecctrl agent continue --agent-name jobagent1 --pretty-print
```

■ Windowsの場合

```
%InstallDirectory%\bin\jcexecutor\jcexecctrl agent continue --agent-name jobagent1 --pretty-print
```

jcexecctrl agent continueコマンドの詳細は<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「3.33 jcexecctrl スタンダードモードのリソース参照・操作」を参照してください。

以下は出力例となります。resultフィールドがSuccessとなっていれば成功です。

```
{
  "result": "Success",
  "error": {
    "has_error": false,
    "code": 0,
    "message": "",
    "reason": ""
  }
}
```

jobagent1の再開に成功すると、jobagent1のステータスがCONNECTEDになります。以降は新規にリクエストを投入しても実行されるようになります。

以上でマシンの障害復旧後からエージェントの動作の再開までの作業は完了です。



次回jobagent1が再起動した場合にCONNECTEDの状態でも起動するように、jobagent1の設定ファイルjcexecutor_agent.yamlの**request.onStartup.action**を元の値に戻してください。

設定の戻し忘れにより意図せず設定値がpauseのままであった場合、メンテナンスなどの計画的な再起動を行った際に意図せずリクエスト処理が停止してしまい、想定していた業務が再開されないなどの問題が発生する可能性があります。

3.1.4.3. リクエストの再実行時に以前の結果を残さず上書きする

リクエストの再実行時にエージェント停止前に出力されていたリクエストの結果を削除したい場合、エージェントの設定ファイル(jcexecutor_agent.yaml)で**request.restart**の**resultAppend**を false に設定することで出力結果の追記を行わず上書きする動作となります。

この場合区切り文字は出力されません。

以下は、エージェントの設定ファイル(jcexecutor_agent.yaml)で設定を行う場合のサンプルです。なお設定ファイルのうち一部のパラメータのみの抜粋となりますのでご注意ください。

```
request:
  restart:
    resultAppend: false
```

3.1.5. リクエスト実行時の環境変数の設定を変更する

リクエスト実行時の環境変数は、エージェントの設定およびマネージャ側の設定によって決まります。

本節では、エージェント側で行う環境変数の設定変更について説明します。

マネージャ側の設定やデフォルトで設定される環境変数の詳細については<スタンダードモード用環境構築ガイド>の14章「ジョブ実行時の環境変数の取り扱い」を参照してください。

3.1.5.1. リクエスト実行時の環境変数 PATH をマネージャ側でまとめて設定する

リクエスト実行時の環境変数 PATH の値はリクエストを実行するエージェントの環境に合わせて自動的に設定します。



エージェントの環境に合わせて自動的に設定する値については<スタンダードモード用環境構築ガイド>の14章「ジョブ実行時の環境変数の取り扱い」を参照してください。

このため、例えば特定のアプリケーションの実行ファイルに追加でパスを通す必要がある場合、以下のような対応が必要となります。

- リクエストのバッチ処理の最初で環境変数 PATH を修正する
- 自動的に設定された PATH に含まれる場所にシンボリックリンクなどを配置する

このため、エージェントの環境が多数ある場合、同様の対応が必要な環境が増えるほど設定の手間が大きくなっていくと考えられます。

このような場合に、エージェントの設定ファイル(jcexecutor_agent.yaml)で**request.environment.export**の**path**を manager とすることでマネージャ側の環境変数 PATH を引き継ぐ動作に変更できます。

例えばジョブネットワークの環境変数として PATH を指定した場合、本設定を行ったエージェントで実行されるリクエストの実行時の環境変数 PATH はジョブネットワークで指定した値となります。このため、マネージャ側で必要に応じてジョブネットワーク単位で環境変数 PATH を指定するといった対応ができます。

以下は、エージェントの設定ファイル (jcexecutor_agent.yaml) で設定を行う場合のサンプルです。なお設定ファイルのうち一部のパラメータのみの抜粋となりますのでご注意ください。

```
request:
  environment:
    export:
      path: manager
```

3.1.5.2. リクエスト実行時にユーザプロファイルとユーザ環境変数を読み込む設定を変更する (Windows)

Windowsの場合、リクエストの実行時にユーザプロファイルとユーザ環境変数を読み込んでリクエストを実行します。



ユーザプロファイルの読み込み処理が他プロセスと競合することでリクエストの実行で異常が発生する可能性があります。特にウイルススキャンソフトがプロファイルデータをスキャンしていると発生する可能性が高いため、スキャン対象外にする等の設定をシステム側で行う必要があります。

詳細については、<セットアップガイド>の「2.2 インストールの準備をする」を参照してください。

この動作を変更したい場合、エージェントの設定ファイル (jcexecutor_agent.yaml) で **request.environment** の **userProfile** と **userEnvironment** をそれぞれ false とすることでユーザプロファイルとユーザ環境変数を読み込まないように変更できます。



ユーザプロファイルとユーザ環境変数の読み込みはリクエストの実行毎に行うため、読み込まないように設定することで処理性能が向上する場合があります。



バッチ処理の内容にユーザプロファイルの読み込みやユーザ環境変数が必要なコマンドなどが含まれる場合、バッチ処理が正常に終了しなくなる可能性があります。

またユーザプロファイルの読み込みのみを false とした場合、該当ユーザのユーザ環境変数を一部取得できません。

以下は、エージェントの設定ファイル (jcexecutor_agent.yaml) でユーザプロファイルとユーザ環境変数の読み込みを無効にする場合のサンプルです。なお設定ファイルのうち一部のパラメータのみの抜粋となりますのでご注意ください。

```
request:
  environment:
    userProfile: false
    userEnvironment: false
```

またユーザプロファイルとユーザ環境変数の設定はリクエストの実行ユーザ毎個別に設定することもできます。

以下は、エージェントの設定ファイル (jcexecutor_agent.yaml) でユーザ毎に設定を行う場合のサンプルです。なお設定ファイルのうち一部のパラメータのみの抜粋となりますのでご注意ください。

```
request:
  environment:
    userSetting:
```

```
- userName: Administrator
  userProfile: false
  userEnvironment: false
- userName: user1
  userProfile: false
  userEnvironment: false
```

3.1.6. リクエストの実行ユーザの設定変更を即時に反映できるように変更する (Windows)

Windowsの場合、リクエストの実行ユーザ切り替えのために内部的に該当ユーザでのログオンが必要となります。

デフォルトではこのログオンの回数を減らすために、一度ログオンしたときに取得したユーザのトークンをキャッシュして利用します。

またWindowsにおいて権限などの一部情報はトークンに含まれますので、ユーザ情報を変更した場合にエージェントを再起動して再ログオンするまで変更が反映されない可能性があります。

変更を即時に反映するようにしたい場合、エージェントの設定ファイル (jcxecutor_agent.yaml) で **request** の **clearUserToken** を `always` とすることでキャッシュを利用せず、リクエストの実行毎にログオンするように動作を変更できます。



この場合、リクエストの実行毎にログオンすることになりますので性能が下がる可能性があります。

以下は、エージェントの設定ファイル (jcxecutor_agent.yaml) で設定を行う場合のサンプルです。なお設定ファイルのうち一部のパラメータのみの抜粋となりますのでご注意ください。

```
request:
  clearUserToken: always
```

3.1.7. 巨大な出力結果の退避によるディスク使用量を制限する

リクエストの出力結果をマネージャに転送する際、転送するサイズには制限があります。転送するサイズの制限はマネージャ側で設定された値に依存します。

リクエストの出力結果がマネージャ側で設定された転送するサイズを超過している場合、超過した分のデータがマネージャ側に転送されません。

この場合、リクエストの終了時にエージェント側で `spool-dir` のディレクトリ配下の以下の場所にリクエストの出力結果を退避します。

```
jcxecutor/agent/result/<リクエストID>/stdout
```

```
jcxecutor/agent/result/<リクエストID>/stderr
```



リクエストIDはUUIDの形式となります。CL/Win上では表示されないため、マネージャ側で **jcxectl get** で確認いただく必要があります。

デフォルトの動作ではこの退避されたファイルは削除されません。このため、何らかの理由により巨大な出力結果が続くとエージェント側のディスク使用量を圧迫する可能性があります。

これを回避したい場合、エージェントの設定ファイル (jcxecutor_agent.yaml) で **request** の **temporaryResultFile** の **maxSize** の値を `0` 以上の数値とすることで退避ファイルの合計サイズ (MB) の上限を設定することができます。

出力結果ファイルの退避時に退避ファイルの合計サイズが設定値を超過した場合、作成日時が古い退避ファイルから順番に上限サイズに収まるように自動的に削除します。

以下は、エージェントの設定ファイル (jcexecutor_agent.yaml) で設定を行う場合のサンプルです。なお設定ファイルのうち一部のパラメータのみの抜粋となりますのでご注意ください。

```
request:
  temporaryResultFile:
    maxSize: 1000
```

3.1.8. 実行中リクエストの出力結果の更新頻度を変更する

実行中のリクエストの出力結果は定期的にマネージャ側へ転送されます。デフォルトでは60秒ごとになっています。

このため、CL/Winの出力結果などは60秒毎に更新されることとなります。

マネージャへの転送間隔を変更したい場合は、エージェントの設定ファイル (jcexecutor_agent.yaml) の **request.sendResult** の **sendInterval** の値を変更します。

以下は、エージェントの設定ファイル (jcexecutor_agent.yaml) で設定を行う場合のサンプルです。なお設定ファイルのうち一部のパラメータのみの抜粋となりますのでご注意ください。

```
request:
  sendResult:
    sendInterval: 1000
```

3.1.9. ファイル待ち合わせの動作を変更する

ファイル待ち合わせの通過条件が「存在する」または「更新」の場合、デフォルトではファイルの存在や更新を確認した時点で待ち合わせを終了します。

このため、ファイル転送によって新規に作成・更新されるファイルを対象にした場合など、対象のファイルの転送完了を待ち合わせすることはできません。

こういったファイルの転送完了を待ち合わせたい場合などに、ファイル待ち合わせの通過条件が「存在する」または「更新」の場合、待ち合わせの終了条件として以下の判定を追加できます。

■通過条件を満たした際に対象のファイルが他プロセスによってオープンされていないことを確認します。

■通過条件を満たした際に一定時間の間に対象のファイルが更新されていないことを確認します。

通過条件に加えて、これらの条件を満たした場合にファイル待ち合わせを終了する動作となりますので、転送完了を待ち合わせることができます。



ファイル作成中、ファイルがオープンされたままとなる場合にはプロセスのオープン確認のみ行えば問題ありません。そうではなく、オープンとクローズが繰り返されるような場合は最終更新時刻から一定時間ファイルが更新されていないことを以てファイル作成が完了したと見なすようにしてください。これらの両方を指定することも可能です。

これらの設定は、エージェントの設定ファイル (jcexecutor_agent.yaml) で **filecheck** の **confirmClose**、**confirmNoUpdate** を変更することで有効にできます。

また **filecheck** の **noUpdateTime** の値によって、確認する更新時間を変更できます。

以下は、エージェントの設定ファイル (jcexecutor_agent.yaml) で設定を行う場合のサンプルです。なお設定ファイルのうち一部のパラメータのみの抜粋となりますのでご注意ください。

```
filecheck:  
  confirmClose: true  
  confirmNoUpdate: true  
  noUpdateTime: 20
```

3.2. エージェントの構成情報のバックアップ・復元

本章ではエージェントの設定ファイルなどの構成情報のバックアップと復元方法について説明します。

3.2.1. エージェントの構成情報のバックアップ

バックアップが必要となるファイルについて、手動でバックアップを行います。このときエージェントは起動したままで問題ありません。

バックアップが必要となるファイルは以下の通りです。

表3.2 エージェントの構成情報のバックアップファイル

ファイル	説明
Linux <インストールディレクトリ>/data/agdata Windows <%ProgramDataのパス%>\JobCenter\Agent\agdata	エージェントのインスタンスデータ
Linux <インストールディレクトリ>/data/aglang Windows <%ProgramDataのパス%>\JobCenter\Agent\aglang	エージェントの言語設定データ
<spool-dirのパス>/log/jcexecutor_agent.yaml	インスタンス毎の設定ファイル spool-dirのパスは jcagctrl list --format json --pretty-print の spool-dir の値から確認できます。
<インスタンスの秘密鍵>	インスタンス毎の秘密鍵ファイル jcagctrl list --format json --pretty-print の private-key の値から確認できます。
<インスタンスのルート証明書>	インスタンス毎のルート証明書 jcagctrl list --format json --pretty-print の root-ca の値から確認できます。



インスタンス毎のユーザグループに所属するユーザについては、OS側のユーザグループで管理されており、本構成情報のバックアップ・復元対象には含まれていません。

所属するユーザー一覧のみであれば**jcagctrl list-user --instance-name <インスタンス名>**で取得できるため、この結果をとっておくことを推奨します。

3.2.2. エージェントの構成情報の復元



■事前に全てのインスタンスを停止する必要があります。

インスタンスの停止方法については2章「[エージェントの環境構築](#)」を参照してください。

■対応するエージェントキューにリクエストが残っている状態で復元しないでください。

リクエストが残っている状態でエージェントのみを復元した場合、リクエストに対応する単位ジョブが異常終了する可能性があります。

3.2.2.1. リクエストデータの削除

以下のディレクトリ配下の全てのファイル（リクエストのデータ）を削除します。

```
<spool-dirのパス>/jcxecutor/agent/request/
```



全てのインスタンスのspool-dirに対してリクエストのデータ削除を行ってください。

3.2.2.2. バックアップファイルの復元

バックアップしたファイルについて元の場所に配置（上書き）します。

エージェントの言語データとインスタンスデータのファイル配置後、各インスタンスのファイルを配置します。

別環境で復元する場合、各インスタンスデータの配置前に事前にspool-dirのディレクトリを作成する必要があります。

ディレクトリ作成後、秘密鍵、ルート証明書を配置し、**jcagctrl update**を一回実行いただくことでspool-dir配下が初期化されますので、その後インスタンス毎の残りのファイルを配置してください。



spool-dirで指定するディレクトリのパーミッションは755である必要があります。umaskを設定されている場合など、ディレクトリ作成後必要に応じてパーミッションを変更してください。

3.2.2.3. エージェントの起動

リクエストデータの削除、バックアップファイルの上書き完了後、各インスタンスを起動します。



インスタンスの起動方法については2章「[エージェントの環境構築](#)」を参照してください。

3.3. JobCenter AGのプロセス監視

この節では、JobCenter AGのプロセスを監視する方法について説明します。

JobCenter MGのプロセスを監視する方法については、<スタンダードモード用環境構築ガイド>の19章「JobCenter MGのプロセスを監視する」を参照してください。

3.3.1. JobCenter AGプロセスの監視方法(Windowsの場合)

Windows版JobCenter AGプロセスの監視を行いたい場合は、以下のサービスの監視を行います。

インスタンスIDは**jcagctrl list**コマンドで確認することができます。詳細は<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「4.1 jcagctrl エージェントの情報を管理」を参照してください。

```
JobCenter Agent Service(<監視対象のJobCenterエージェントのインスタンスID>)
```

3.3.2. JobCenter AGプロセスの監視方法(Linuxの場合)

Linux版JobCenter AGプロセスの監視を行いたい場合は、以下のコマンドを実行結果を利用します。

インスタンスIDは**jcagctrl list**コマンドで確認することができます。詳細は<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「4.1 jcagctrl エージェントの情報を管理」を参照してください。

```
systemctl -q is-active jcexecutor_agent_<監視対象のJobCenterエージェントのインスタンスID>.service
```

JobCenter AGサービスが正常に起動している場合は、コマンドの戻り値が0になります。上記コマンドの実行結果を利用してAGプロセスが正常に起動しているかどうかを監視することができます。

4. OS要塞化

この章ではSELinux設定およびユーザ環境をセキュアにしたサーバ環境におけるJobCenter AGの運用に関して説明します。対象となるOSは以下となります。

- Red Hat Enterprise Linux 7
- Red Hat Enterprise Linux 8
- Red Hat Enterprise Linux 9

SELinux設定をセキュアにしたサーバ環境とは、`/etc/selinux/config`ファイルに`SELINUX=enforcing`を設定した環境を指します。

■ SELinux設定をセキュアにしたサーバ環境におけるJobCenter AGの運用に関する留意点を以下に示します。

- JobCenter AG用に提供されるSELinuxポリシーファイル(`jobcenter.pp`)は、JobCenterの動作のベースとなるものとして提供しており、JobCenter運用環境において必要に応じてSELinuxポリシーをカスタマイズして頂くことを想定しています。そのため、JobCenter運用環境においてSELinuxに関する修正や設定を適切に行う体制が無い場合は、SELinux設定ファイルの`SELINUX(/etc/selinux/config`ファイルの`SELINUX=`の設定)に`permissive`(あるいは`disabled`)を選択してください。
- SELinux設定ファイルの`SELINUXTYPE(/etc/selinux/config`ファイルの`SELINUXTYPE=`の設定)は、既定値の`targeted`のまま変更しないでください。
- JobCenterの動作に関連するOSのログインユーザのSELinuxコンテキストは、既定値の`unconfined_u:unconfined_r:unconfined_t:s0-s0:c0.c1023`のまま変更しないでください。

ユーザ環境をセキュアにしたサーバ環境とは、ユーザにおけるアクセス権が制限されている環境 (`umask`設定を既定値から`077`等に設定変更) を指します。

■ ユーザ環境をセキュアにしたサーバ環境におけるJobCenter AGの運用に関する留意点を以下に示します。

- (JobCenter自体の動作には問題ありませんが、) `umask`設定が`077`等に変更された環境では、JobCenterのコマンドを実行してファイル出力する場合、出力(保存)されるファイルの権限が変更後の`umask`設定の影響を受けます。

5. トラブルシューティング

JobCenterのトラブルシューティングに関する情報を記載しています。

5.1. JobCenter Agent の障害発生時、原因究明に必要な情報を採取する

JobCenter Agent で障害が発生しサポート窓口へお問い合わせいただく際に、お問い合わせの内容によっては原因究明に必要な情報を採取していただく必要があります。本章では情報の採取方法について説明します。

5.1.1. jc_getinfoコマンドで採取する場合

jc_getinfoコマンドで採取する手順は以下のとおりです。

1. 障害が発生したマシン上でjc_getinfoコマンドを実行し、情報を採取します。

jc_getinfoコマンドの詳細は<スタンダードモード用コマンドリファレンス>の「8.3 jc_getinfo JobCenter の障害発生時、原因究明に必要なエージェントに関する1次情報を漏れなく採取」を参照してください。

5.2. JobCenter Agentのログフォーマット

JobCenter Agentが出力するログのフォーマットについて記載します。

ログの出力パスについて、ログサイズ、世代数の変更方法については「[3.1.3 ログサイズ、世代数を変更する](#)」を参照してください。

このログは、主に障害発生時の一次情報解析で利用します。<スタンダードモード用環境構築ガイド>の「24.3 単位ジョブが異常終了する場合に考えられる原因と対応」にジョブ実行がエラーとなった場合にこのログに出力される情報例を記載しているため、あわせて参照してください。

このログは以下のフォーマットで出力されます。

```
<TimeDate> <Level> <Source>:<line> <Msg> <Data>
```

ログ中のそれぞれの要素は以下のような意味です。

表5.1 エージェントのログフォーマット

フォーマット	説明
TimeDate	ISO 8601形式での時刻
Level	ログレベル <ul style="list-style-type: none"> ■ info: 正常処理のうち、出力すべき重要な情報 ■ error: 正常動作できない問題が発生した場合の問題に関する情報 ■ debug: サポートでの障害解析時に有用な情報
Source	ログを出力したJobCenterのソースコードファイル名
Line	ログを出力したJobCenterのソースコードファイル行数
Msg	ログメッセージ
Data	関連するJobCenter内部のデータ情報(JSON形式)

